

第67回現代歌人協会賞選考経過

東 直子

今年度の現代歌人協会選考委員は、昨年続き、内山晶太、梅内美華子、小島ゆかり、外塚喬、富田睦子、吉川宏志、東直子(委員長)の七名。

会員アンケート(二〇二二年中に出版された第一歌集から一、二

店／千葉優作(塔)『あるはなく』(青磁社)

この六歌集について、四月一日、学士会館に於いて対面での最終選考が行われた。各人のピックアップした資料を参照に、忌憚のない意見を交わした。

・嶋粟太郎『羽と風鈴』

乗り過ごして何駅目だろう菱形のひかりの中につま先を置く写実を生かした丁寧な描写力が高く評価された。一首一首から確実に見えてくる景色や背景など、入りやすいが、それ故の平淡さもある。震災で被害のあった故郷石巻への想いを、離れて暮らす現在地から詠んだ歌も注目された。

・上坂あゆ美『老人ホームで死ぬほどモテたい』

死んだらさ紫の世界に行くんだよ スナックはまゆうの看板みたいな

地方都市で幼少期を過ごし、進学を期に上京し、東京で仕事をす。典型的ともいえる半生を下敷きに、現代的でインパクトのある場面が力強く立ち上がる。歌の作り方自体は割とオーソドックスで、文体によっては詩的な飛躍に

欠ける面も見られた。

・田村穂隆『イマジナシオン』

まぼろしのような昨夜がポケットのマッチの箱で本物になる新鮮な切り口と発想力で、日常に詩的な異化を与えた。その中で、

現代の若者たちの繊細な心理が浮き彫りになったり、懐かしさに触れたりする。多様であるがゆえに人物像の見えにくさや散漫な印象を受けたという意見があった。

・田村穂隆『湖とファルセット』

ひげを抜きたいひげを抜きたいひげを抜く 脳に何かがみなぎる感じ

自身の性に対する違和感や父性に対する反発をはじめとする、切実な内的衝動にかられた歌が強い印象を残し、迫力がある。斬新な言語感覚があり、テーマと表現の両面で注目すべき点がある。内面

第67回現代歌人協会賞

歌集『うすがみの銀河』

鈴木加成太(すずき、かなた)

二〇二三年十一月二十五日(角川書店)

【略歴】一九九三年生。愛知県出身。「かりん」所属。第六十一回角川短歌賞受賞。

歌集『湖とファルセット』

田村穂隆(たむら、ほだか)

二〇二三年三月一日(現代短歌社)

【略歴】一九九六年生。島根県出身。「塔」所属。第八回現代短歌社賞次席

に向かう歌が多く、外界の手触りが淡いという感想もあった。

・鈴木加成太『うすがみの銀河』

しるがねの梯子に百の素足ふれプールの水の綾へ降りゆく

日常的な場面から、イマジネーションによって詩的な飛躍力を得る確かな表現力がある。家族への特殊な感情がユニークに描かれている点も注目された。歌集の途中で旧かなでの表記に変わり、そこから表現もやや硬くなった。

・千葉優作『あるはなく』

見上げれば虫に食はれたところから空に変はつてゐるさくら

葉

言葉遣いがおおらかで、冷静な目線で描かれた独特の世界は嫌みがなく、韻律も心地がよい。感覚的な部分と現実とのバランスがよく、ひらがなを多用したやわらかな印象の歌が持ち味。短歌的に纏まりすぎていて作意的であるという意見もあった。

話し合いの中で、『うすがみの銀河』と『湖とファルセット』と『あるはなく』に次第に絞られた。さらなる討議を重ねた結果、着実な表現力が評価され、会員アンケートでも人気の高かった『うすがみの銀河』と、切実な訴求力があり読みごたえのある『湖とファルセット』の同時受賞となった。それぞれ着実な歩みを続けてきた二人の歌人は、現代短歌の新しい礎となるだろう。

現代歌人協会 会報 175

冊を推薦)の結果(有効投票数二二三票)を踏まえた推薦歌集をSincの会議室上で討議した結果、二次選考に残す六歌集を決定した(三月二日)。以下、該当歌集を刊行順に記す。

嶋粟太郎(未来)『羽と風鈴』(書誌侃侃房)／上坂あゆ美(無所属)『老人ホームで死ぬほどモテたい』(書誌侃侃房)／tonon*(塔)『イマジナシオン』(書誌侃侃房)／

田村穂隆(塔)『湖とファルセット』(現代短歌社)／鈴木加成太(かりん)『うすがみの銀河』(角川書